

「その実によって見分ける」—あなたは何を見分けていますか

聖書には多くの知恵のことばがありますが、ひとの外見や、その言葉よりも、「何を生み出しているか」によって見極めることは、確かに大切なことです。

もしあなたがエホバの証人であるなら、次の「ものみの塔」の記事に同意なさるでしょうか。長い引用ですが、まずこれをお読み下さい。

「神の観点からすれば、ある宗教が受け入れ得るものであるかどうかは、一つの要素だけで決まるものではありません。神に受け入れられる宗教であるためには、その教えや活動が真理のみ言葉、聖書と一致していなければなりません。

神の是認する崇拜が生み出す実は、エホバ神の規準と一致していなければならないのです。イエス・キリストは、山上の垂訓の中で、神を代表すると偽って主張する預言者たちが現われることを示して、このように言われました。「羊の覆いを付けてあなた方のもとに来る偽預言者たちに警戒していなさい。内側では、彼らはむさぼり食うおおかみです。あなた方は、その実によって彼らを見分けるでしょう。いばらからぶどうを、あざみからいちじくを集めることなどないではありませんか。同じように、良い木はみなりっぱな実を生み出し、腐った木はみな無価値な実を生み出すのです。良い木は無価値な実を結ぶことができず、腐った木がりっぱな実を生み出すこともできません。りっぱな実を生み出していない木はみな切り倒されて火の中に投げ込まれます。それでほんとうに、あなた方はその実によってそれらの人々を見分けるのです」。(マタイ 7:15 - 20) この言葉は、わたしたちが霊的に警戒している必要があることを教えています。ある宗教指導者あるいは宗教グループが神とキリストに受け入れられている、とわたしたちは思うかもしれませんが、それは思い違いであることもあり得ます。

ある宗教が、神の是認を受けていると主張し、その牧師が聖書の一部を読むとしても、それは神を喜ばせる崇拜の方式であることを意味するものではありません。その指導者たちは、神が彼らを通して働いておられるかのように見える、印象的な事柄さえ行なうかもしれませんが、それでもその宗教は、神に受け入れられる実を生み出していない偽物かもしれません。

過去におけると同じように今日でも、多くの宗教は、神が明示しておられる真理を信奉する代わりに、人間の思想や哲学をもてはやします。したがって、聖書が与えている次の警告はとりわけ適切であると言えます。「気をつけなさい。もしかすると、人間の伝統にしたがい、また世の基礎的な事柄にしたがってキリストにしたがわない哲学やむなしい欺きにより、あなた方をえじきとして連れ去る者がいるかもしれません」—コロサイ 2:8。

*** 塔 96 9/15 4-6 ページ すべての宗教が神に喜ばれますか ***

この論議のなかで、「ある宗教」「宗教グループ」が神の是認を受けているか、そうでない

かということを論証するために、マタイ7章の「実によって見分ける」という記述に言及しています。

しかし、このイエスの言葉は、宗教団体を判断、識別するために与えられたものではありません。

「あなた方はその実によってそれらの人々を見分ける」というのは、ある特定のグループや団体ではなく、あくまで、個人個人を、その実によって見分けなさいということです。聖書全体のどこを読んでも、ある特定のグループがグループとして神に是認されるという論理は見つかりません。

真のクリスチャン会衆、偽のクリスチャン会衆などという概念も存在しません。

仮にまだ使徒たちが存在していた1世紀当時の会衆を「真の会衆」と呼び、その後の「背教によって腐敗した」会衆を「偽の会衆」と呼ぶとしても、前者のクリスチャン会衆の中にも「偽兄弟」「偽教師」が少なからず存在しました。それらの偽クリスチャンをすべて含んでいた当時の「クリスチャン会衆」は会衆（グループ）として是認されていたわけではありません。

そもそも、クリスチャンであるというのは単なる自己申告ですから、その集まりである「会衆」とは、あくまで、その信仰と行いによって個々のクリスチャンが神の是認を得られるよう励み務める人々の集まり以外の何物でもありません。

そして、「小麦と雑草（毒麦）」の例えから分かるように、全歴史を通して、そのような状態にあるのがクリスチャン会衆です。

(マタイ 13:37 - 43) … 「りっぱな種をまく者は人の子です。畑は世界です。りっぱな種、それは王国の子たちです。それに対し、雑草は邪悪な者の子たちであり、それをまいた敵は悪魔です。収穫は事物の体制の終結であり、刈り取る者はみ使いたちです。それゆえ、雑草が集められて火で焼かれるのと同じように、事物の体制の終結のときにもそのようになります。人の子は自分の使いたちを遣わし、彼らは、すべてつまずきのもとになるものや不法を行なっている者を自分の王国から集め出し、それを火の燃える炉の中に投げ込みます。そこで〔彼らは〕泣き悲しんだり歯ざしりしたりするでしょう。その時、義人たちはその父の王国で太陽のように明るく輝くのです。耳のある人は聴きなさい。」

不思議に聞こえるかも知れませんが、聖書によれば「会衆（教会）」とは、神の子供と悪魔の子供が渾然一体となって存在しているグループであるということです。

そして、イエスの語られた多くの例え話や、預言の記述は、『最終的』にそれらが分けられる、ということを教えています。

そして、それまでの間、人々は、それらの個々の人を「その実によって見分ける」ことが必要となるということが強調されています。

では、その『最終的』に分けられるのは、いつ、どんな方法によるのでしょうか。
「偽者」の方は「世の終わり」の時に、み使いによって、集め出され、「火の燃える炉の中に投げ込まれ」つまり滅びを経験することによって、一方、「本物」の方はキリストご自身によって、「父の王国」へ入れられることによって、両者の分離がなされることが分かります。

それらの人々が、どの時点まで、「会衆（教会）」と呼ばれるかは、断言はできませんが、天の王国に入った人々、（キリストの花嫁）が「会衆」と呼ばれている箇所はありませんので、人間として、地上に留まっている間の、限られた呼称であると言えます。従って、最初から最後まで、終始一貫、本物と偽物が入り交じった状態で存在するものが「クリスチャン会衆」というものであるというのが、聖書が実際に示しているところの、正確な理解でしょう。

その分ける事は、人間の及ばないところでなされるもので、明白なものです。
ある人が、「私たちは本物で、あなたは、偽者としてすでに分けられている」と誰かに言うのは、勝手ですが、すでに、偽者であることが確定しているにも関わらず、その本人が、全く、気付かず、その自覚も全くないという人が、何十億人もいるというようなことが、起こりうるのでしょうか。

この事に関連した聖句は、至るところにあり、全ての記述は、実際の出来事、経験する事によって明らかになることを示しています。

「当人に気付かない」ような「最終的な神の裁き」などあり得ないでしょう。

ものみの塔によれば、そのような分離がすでに100年近く前にすでに生じているという事ですが、その間に、何の自覚も無く、生まれ、死んでいった人々は世界中に数え切れないくらい、いることとなります。

自分たちだけが、本物のクリスチャン会衆であり、他は全て偽者で、それはすでに、確定しており、神の承認済みの事であるという主張は、あらゆる聖句に矛盾し、見当外れな認識であると言うに留まらず、余りに滑稽な主張であると言わねばならないでしょう。

ここで、もう一度最初に戻って、改めて、上の「ものみの塔」の引用分を読んでみてください。その記述の「本当の意味」が分かると思います。